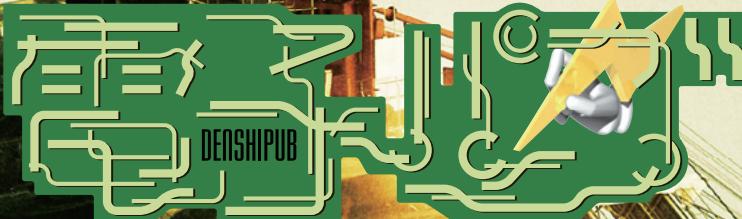


2015.JAN.



2



弾射音  
わが手は翼  
われは鳥

栗林元 薔薇の刺青(ニ)

murbo 機械恐竜現る!の作り方

ショートショート  
アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか?  
付録:機械羊の3DCG AR

無料  
FREE

# 彗微の刺青



## (二)

続きを読む

翌日、津田から入国管理局の資料がファックスで届いた。早速例の電話を入れた後、電話で調査に入った。謄本の生田の住所から電話を調べたが、電話してみるとすでに電話は使われていなかつた。

栗林元 Kuribayashi Hajime



機械恐竜現る! の作り方  
murbo

第2回  
銀河パトロール  
制式戦闘機  
ヴァルター7

続きを読む

大きな白い車が、学校の正面のすぐ外にとまっていた。

哲郎は信也の前に立つて、さつさと歩いていき、うしろのドアをあけた。哲郎が車にのりこんでも、信也はひらいたままのドアの横で気おくれして立ちすくんだ。

## 「のれよ」

哲郎が車の中から言った。信也はおそるおそる足を踏みいれ、シートにからだをあげた。パパの車とはずいぶんちがう。信也は思つた。ドアが大きい。なかも広い。シートはなんだか固い。でも、ドアの内側の取っ手は似たようななかたちだ。

## 「ドアをしめろよ」

続きを読む

# 薔薇の刺青

栗林元

## 近日刊行予定



# パッチワールド

弾射音

発売中!



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>

# わが手は翼 われは鳥

「哲郎の母です。よろしくね」「ははい」  
哲郎のおかあさんが前に向きなおる。  
車が動きだした。  
「いつも哲郎と仲よくしていただきてうれしいわ」  
運転しながら、哲郎のおかあさんは信也にそう言つた。

「いつも哲郎と仲よくしていただきてうれしいわ」運転しながら、哲郎のおかあさんは信也にそう言った。信也は緊張して、ろくに返事もできなかつた。この人はほんとにぼくが相沢くんの友だちだと思つてゐるのだろうか。おとなからみれば、おなじクラスのことものはみな友だちになつてしまふのかもしれない。信也はそう思つた。

「なんだう? 信也は哲郎の考へていることをおしゃりかねた。信也を見る目は、このあいだとおなじように、からかっているみたいだ。パイロットになりたいという作文のことで、まだからかい足りないのだろうか。それとも、すなおに友だちになつてくれと言えないだけなのだろうか。」  
しかし、信也自身、哲郎とはちがう世界の人間だという気持ちがしてならないのだった。こんな高級なマンションにつれてこられれば、なあさらだつた。  
哲郎が、からになつたグラスをテーブルに置

それとも、相沢くんはぼくのことを友だちだつて、おなかつたのだ。

かあさんは話したのだろうか？

すみれ

信也は応接間に通された。哲郎はランドセルをソファ

信也はランドセルをソファの下に置き、哲郎の正面に

おそれすとすれど、  
高級 そうなマンションだつた。

のせてはいつてくる。にこにこしたままそれを信也と折

のおかあさんは出ていった。

ほんとはゆきくりして書いていいぞ」

いつきに半分飲んでしまう。

スを少し飲み、ケーキを少しかじつた。哲郎はふんぞり

どうして相沢くんはきゅうにぼくを家に招いてくれた

「よ、吉田といいます」  
信也が緊張してそう言うと、女人人はますますにこにこした。  
「うん」  
「連れ車店にすわらせました女のノルマアリヤアリ、シートとシートのおしゃれにから顔をのぞかせた。にこにこ笑つていて、きれいな人だつた。

となんかできやしないんだ。飛ぶのは飛行機だけだ。パイ

ロットはそれを操縦するだけなんだ」

「でも、それが空を飛ぶってことだよ。ほかにあるの？」

「飛行機なんかにのらないで、自分の力で飛ぶんだよ」

信也はあつけにとられた。

ひょとしたら、頭がおかしいんじゃないだろうか。

「おれの頭がおかしいんだと思つてるんだろう」

「そ、そんなことは……」

「いいよ、べつに。どうせわかりっこないんだ。でも、

人間が自分の力だけで空を飛ぶ方法はぜつたにあるん

だ。子分になつたら、それを教えてやろうつて言つてるん

だ」

「……人間は鳥じやないから、飛行機やヘリコプターに

のらないと、空を飛べないんだよ」

「ぜつたに、そつたつて言えるな」

哲郎の声が低くなつた。信也をこわい目でにらみつけて

「……ほんとに、あるの？」

「あさ。教えてやるよ。だからおれの子分になれ」

「子分になつたら、なにをするの？」

「なにもしなくていい。ただ、おれといつしよに空を飛

ぶだけだ。だけど、おれが命令したときは、ぜつたに空

を飛ばなくちゃだめだ」

信也はことばにつまつた。

哲郎が立ち上がつた。

「おれの部屋にこいよ。合格だ」

「ちよ、ちよつと待つてーまだ子分になるつてきめたわ

けじや……」

哲郎はあらかえり、さつさとドアを出ていった。信也は

あわてて立ち上がり、ランドセルを取つて、哲郎のあとを

追つた。ケーキもオレンジジュースも、半分以上のこつて

いる。

廊下に出ると、哲郎がべつのドアをあけてはいつていくところだった。信也はそのドアのところまで行き、中をう

かがつた。

「はいれよ」

部屋の中から、哲郎が背を向けたまま言う。まるで泥棒

のよう。信也は足音をたてないようにそつと足を踏みい

れた。

哲郎の部屋だった。信也とおなじ、小学四年生の男の子

の部屋。でも、信也の部屋とはぜんぜんちがつていた。な

んて殺風景なんだろうというが、信也の第一印象だつた。信也はいつもおもちやや本を部屋じゅうにちらかして、

ヘッドの上までがらくただらけになつてしまい、ママにしかられてやつと足の踏み場をつくる程度にかたづけるのだが、哲郎の部屋はまったくちらかつていなかつた。まるで人が住んでいないかと思えるほど、整然として、きれいにそらじされていた。

それから、まるでおとなしの人の部屋のようであることに気がついた。

おもちやらしいおもちやが、まるで見あたらなかつた。ゲームの機械も、ゲームのパッケージも、マンガの本も、プラモデルもない。そのかわり、壁の一面がそつくりそのまま天井までどぞく本だなになつていて、ぎつしりと本がつまつっていた。

部屋のまんなかに、透明のテーブルとおりたたみのイス、大きな窓の横には、黒い大きな机。机の上にはまつ白なパソコンとペン立てとライト。カーペットの上も、まるで子

りひと落ちしないようによきれいだつた。ベッドも、まるでデパートにならんでいる展示品のように、きれいで、シーツがかけてある。

かぎり棚には、およそこどもらしくない置物がばつんばつんとならんでいるだけ。

そして信也は、部屋の中があまりに整然としているのは、物があまりないからではなく、部屋が哲郎の部屋の四倍も

五倍もひろいからだということに気がついた。

「すわれよ」

哲郎が部屋のまんなかのおりたたみイスを指さして言つ

信也はドアの横にランドセルを置いて、なるべく部屋の中をきよろきよろしないように気をつけながらイスに近づき、浅く腰をおろした。

でも、目はどうしても大きな本だなにいつてしまうの

だった。

机の前に腰かけながら、それに気づいた哲郎が言つた。

「ほんどうだろ」

「うん。図書館みたい」

哲郎は笑つた。

「子分になるなら、好きな本を貸してやるぜ」

「ほんどう？」

信也は思わず目をかがやかせて哲郎を見た。

「うそはきらいさ」

「ちよつと見せてね」

信也は立ち上がり、本棚に近づいた。

大きな本は下のほうに、小さな本は上のほうに、きちんとならべられている。本が二列にならんでいるところも、倒れしているところもなかつた。

しかし。

学習図鑑や、児童文学全集もたしかにあつた。でも、そ

れらは、すみつこのほうにかためてあつて、たな全体から

すれば、ほんの一部分なのだった。

本のほとんどは、こども向けのものではなかつた。おと

なが読むような、ふつうの本だった。

背表紙のタイトルを見て、もつとびっくりした。

催眠術、瞑想、神秘魔術、ヨガ、心靈術……。

信也は目をみはり、それから少しこわくなつた。

「どうした？」

超能力とか魔術とか幽霊のマンガは、数え切れないほど

ある。雑誌のつている三分のーが、そういうた話のもの

であることはたしかだ。信也もそういうマンガはきらいで

はない。

だけど、これはマンガじゃない。どうやら、まじめにそ

のことが書いてある。おとなの本なのだ。きっと、魔術の

やり方が、ちゃんとそのまま書いてあるのだ。

信也は本だからあとぞさりした。

「あ、相沢くん、こんな本ばかり読むの？」

「なんだよ、氣味が悪そな顔して」

「だつて——」

哲郎はニヤニヤ笑つている。信也がこわがつてているのを

楽しんでいるかのようだ。

「クラスのほかの子にはこのことを言わないのでおこう。信

也は思つた。相沢くんがこんな本をこんなにたくさん持つ

てることを話したらみんなますます相沢くんを避け

るようになつてしまふ。

いや、相沢くんの家に招かれたことじたい、言わないほ

うがいいかもしない。

「ジエ・ジエット機とかの本はないの？」

信也はかずれる声で言つた。

「ばか。なんべん言つたらわかるんだよ。おれは飛行機

なんかには興味ないんだ」

信也はげつきよくどの本も手に取らず、イスにもどつて

腰をおろした。

「——相沢くんは、魔術をやつてるの？」

「やつたこともあるよ」

哲郎は平然とした顔でこたえた。

「ひよつとしたら——悪魔を呼び出せるの？」

「ははは。そんなこと、できねえよ。おまえ、おれが悪

魔の手下だと思つたのか」

信也はあわてて首を横に振つた。

「魔術や超能力が好きなわけじゃないんだ」

哲郎は本だから一冊、手に取り、そのページをべらべ

らめくりながら言つた。

「せんぶ、空を飛ぶ方法を調べるために買つたんだ」

「魔術で空が飛べるの？」

「そうじやない——だけど、似たようなもんかな」

哲郎は本をたなにもどし、信也に歩み寄つた。

「子分だから、教えてやる。だれにもしゃべるなよ」

信也はうなづいた。

「ぜつたいだぞ。約束するな？」

哲郎が、こわい目で信也をにらみつける。信也はびきださ

きしながら、もう一度うなづいた。

「おまえ、空を飛ぶ夢を見たことあるか」

「う、うん。あるよ」

「じゃあ、見込みあるな。おれは幼稚園のときから、しょつ

ちゅう空を飛ぶ夢を見てたんだ。すごいリアルな夢なんだ

ぜ。あんまりリアルすぎて、目がさめるときとせんせん

区別がつかないくらいなんだ。目がさめると、いつもくや

しくつてさ。なんでこれが現実じやなくて夢なんだろうつ

て、ふしきな感じだつたんだ」

「ぼくもそういうときあるよ」

「口はさむなよ——それで、あるとき、本かなにかで読

んだんだ。夢で見たことを現実にする方法があるってな。

アメリカの先住民が使う魔術みたいなもので、そういうの

があるらしいんだ。それで、魔術のことが書いてある本を

かたつばしから集めて、読んだんだ。そしたら、人間は大

昔から、世界中で、そういう魔術を発明して、空を飛んで

いたつてことがわかつたんだ」

「なんだか、うそみたいだな」

「おれの言うことが信じられないのか！」

「そ、そうじやないけど」

「子分だろ？」

子分になつたつもりはあいかわらずなかつたが、信也は

思わずうなづいてしまつた。

「で、魔術で空を飛べるようになつたの？」

哲郎は信也をにらみつけた。だが、すぐに目をそらし、

くちびるをかんだ。

「まだだよ。だけど、どうやつてやればいいかわかつた

んだ。もう少しなんだ」

信也はため息をついた。なんとなく、ほつとしたのだ。

哲郎が言つたことがぜんぶほんとうだつたら、もしも哲郎

が魔術で空を飛べるのだとしたら、こわすぎてがまんでき

ないと感じたのだ。

「じつさいに空を飛べるようになるには、まず、夢の中

そういうながら、哲郎は机のところへ行き、ひきだしをあけてなにかを取り出した。

「現実とかわらないくらい、はつきりした夢が見られる

ようにならなくちゃだめなんだ。空を飛ぶ、はつきりとし

た夢さ」

哲郎はふたたび信也に近づいた。

そして、信也の目をのぞきこんで、

「空が飛びたいんだろ？」

信也はうなづいた。

「子分だから、おれの言うとおりにするんだぞ。おれの

言うとおりにしてりや、パイロットになんかならなくてもいいんだ」

哲郎は信也の前にひざますいた。

「イスの背にもたれる。からだの力を抜け」

信也は言われたどおりにした。でも、なんなかうまくか

らだの力を抜くことができなかつた。

哲郎は手ににぎついていたものを信也の目の前にかざした。

銀色の鎖がついた、透明の振り子だつた。

哲郎はそれを信也の顔の前で振りはじめた。

「さ、催眠術？」

「そうだよ」

「や、やだよ。こわいよ」

「言うとおりにしろつて！こわがることなんかないんだ。はつきりと空を飛ぶ夢が見られるようにしてやるだけなんだから」

「ぼ、ぼく帰る」

信也はイスのひじをつかんで立ち上がりろうとした。

哲郎がイスに押しもどした。

「いいかげんにしろ」

信也は哲郎を見上げた。

鬼のような目だつた。

まるで、おとなが真剣に怒つたときのよくな目だ。

信也はおそろしくなつた。

「おれの言うとおりにするまで帰さないからな」

哲郎はふたたび信也の目の前に振り子をかざして、振りはじめた。

「からだの力を抜いて、振り子を見つめる」

「信也は揺れる振り子を見つめた。

「からだの力を抜くんだよ」

「イヌのひじを両手でつよく握りしめていることに気づいて、信也は手をはなし、肩の力を抜いた。

「そうだ。いいぞ。じゃあ、いまから数をかぞえる。五つからぞえたら、おまえの目は閉じる。目を閉じたら、おれの言つとおりのものが見えるようになる。いか、いくぞ。いち、に、さん、し、ご……」

信也のまぶたが重くなつていつた。

哲郎が、振り子を振りながら、もう一方の手で、指をパチンと鳴らした。

同時に、信也は目を閉じてしまった。

目をひらこうとしたが、できなかつた。

しん、としずまりかえつた中で、哲郎の声だけが、なぜかとても澄んで聞こえる。

「おまえの心は落ちついている。からだがリラックスしている。どんどん、どんどんリラックスしていく。いい気持ちだ。いい気持ちだ。楽しい気持ちだ。だんだんだんだん、楽しく、楽しくなつていく。おれがもう一度、指を鳴らすと、おまえは空を飛んでいる。おまえは町の上を飛んでいる。ずっと下のほうに、家がなんらんでいるのが見える。電車が走つていく。自転車や車が道路を行き来している。おまえはどんどん、どんどん高くのぼつっていく。遠くの山も、下のほうに見える。おまえは雲の上に出る。わたあめのような、白い、ふわふわした雲が、おまえのからだの下を、風にのつて流れいく……」

「パチン！」  
信也の耳から、哲郎の声がしだいに消えていった。

わが手は翼  
われは鳥

続く

翌日、津田から入国管理局の資料がファックスで届いた。

早速例の電話を入れた後、電話で調査に入った。謄本の生田の住所から電話を調べたが、電話してみるとすでに電話は使われていなかった。

そこで、その住所のある中区役所へ行き、住民票を調べた。こういうときの為に私は行政書士の資格を持つて調べた。もっとも行政書士としての仕事は、資格を維持する程度に法律事務所から回してもらうのだが。

マリアンは外国人なので、各種届け出はその所在地でしなければならない。結婚している以上、たとえ別居していたとしても、名目の住所は生田と同じにしてはいたずだ。

住民票を調べた結果、マリアンの永住資格の取得と同じ頃に、二人は離婚していた。同時に彼女の足取りが住民票から消える。しかし、生田の新しい住所は辿ることができた。同じ中区の中で移転していた。

生田が法律儀式に届けを出しているため、午前中に調べがついたのだ。

早めの食事をすませて中区の栄四丁目にやつて来た。区役所から歩いて十五分ほどの距離になる。同じ中区の錦三丁目と並ぶ名古屋の歓楽街で、俗に女子大・小路と呼ばれる一角に近い。

夜になればぶつぱりバーの客引きや、きらびやかなネオンの光とカラオケの音で賑やかなこのあたりも、まだ日の高い今時分は、惰眠をむさぼる年増女のよう薄汚くみじめなだけだ。酒屋の軽トラックが往来し、柳橋の卸売市場で食材を仕入れた板前や料理人が仕込みに追われる様子が、開放された店の裏口からだぞく。街は今夜に備えて化粧を始めた。

生田の住むマンションはそこにあった。赤煉瓦の十二階建てで、入り口にはプロンズ製のライオンが座っている。建物全体に、成金趣味の嫌味な装飾

が施され、ネオンの街を見下ろすよう立つてた。駐車場には手入れの悪いアメ車が所狭しと並んでいる。

「だから聞いたるやうが、誰やおまえ」と並んでいた。

「マリアン・パドレスさんを探しているんですと呼んでる」、極道関係者が数多く人居ていた。

「妹さんに頼まれましたね」

「アガすぐに閉まるましたが、私の足がそれ

ることで有名な、あのマンションだった」

階の郵便受けでルームナンバーを確認してエレベーターホールに向かう。

降りてきたエレベーターのドアが開き、ジャージの若い女がゴミ袋をぶら下げて出てきた。

ビーチサンダルを引きずるように歩いていく。

起き抜けのホステスだろう。

女と入れ違いにエレベーターに乗り込むと、

八階のボタンを押した。所々ベンキ剥げた壁

面に、釘でひっかいたような落書きが無数にあつた。

ほとんどが性的なもので、ところどころに、

やくざ出て行け、というような文字が書いてあ

る。ここは安アパート。しかし、精神

的スラム街であることは確かだった。

生田の部屋には表札が出ていなかった。ドア

の外には店物のどんぶりが積み重ねられ、そ

の間を黒いゴキブリが出入りしている。その一

方で、ドノブ、ランプシェードなどの意匠が

ロココ調を模して高級感を演出しようとしている

のが滑稽だ。

ドアの向こうからは、麻雀パイをかき混ぜる

音と、男たちの高笑いが聞こえてきた。平日の午後一時、まつとうな人間の遊んでる時間で

はない。

チャイムを押すと、一瞬部屋の中が静まりか

えり、やがて、ドアの向こう側でレンズ越しに

私を伺う音がした。

キーの合く音が意外に大きく廊下に響き、ド

# 栗林元

Kuribayashi Hajime

# 薔薇の刺情

(二)

「奥さんにお会いしたいんですよ」「だから聞いたるやうが、誰やおまえ」

「わざと作ったよつな関西弁だつた」

「マリアン・パドレスさんを探しているんです

よ。妹さんに頼まれましたね」

「アガすぐに閉まるましたが、私の足がそれ

ることで有名な、あのマンションだった」

階の郵便受けでルームナンバーを確認してエ

レベーターホールに向かう。

降りてきたエレベーターのドアが開き、ジャー

ジ姿の若い女がゴミ袋をぶら下げて出てきた。

ビーチサンダルを引きずるように歩いていく。

起き抜けのホステスだろう。

女と入れ違いにエレベーターに乗り込むと、

八階のボタンを押した。所々ベンキ剥げた壁

面に、釘でひっかいたような落書きが無数にあつた。

ほとんどが性的なもので、ところどころに、

やくざ出て行け、というような文字が書いてあ

る。ここは安アパート。しかし、精神

的スラム街であることは確かだった。

生田の部屋には表札が出ていなかった。ドア

の外には店物のどんぶりが積み重ねられ、そ

の間を黒いゴキブリが出入りしている。その一

方で、ドノブ、ランプシェードなどの意匠が

ロココ調を模して高級感を演出しようとしている

のが滑稽だ。

ドアの向こうからは、麻雀パイをかき混ぜる

音と、男たちの高笑いが聞こえてきた。平日の午後一時、まつとうな人間の遊んでる時間で

はない。

チャイムを押すと、一瞬部屋の中が静まりか

えり、やがて、ドアの向こう側でレンズ越しに

私を伺う音がした。

「今、どこにいるかはわかりませんか」「知らねえよ、あんなひどい女」「ひどいと言つと?」「永住権を取つたとたん、はい、さよならと生きがつた。これでも俺はマリアンを愛していたんだ」

「どこで働いてるかの心当たりでもないですかね」「知らねえな。ふいつと出て行ったきり音沙汰

なしだ。そんなことより、マリアンの妹が日本に来ているのかよ。一度挨拶に来るように言ってくれよ。どうせ、いい女なんだろ。姉ちゃんと同じようにかわいがってやるぜ」

そう言つて下卑た笑い声を上げた。部屋の奥から押殺したような含み笑いが聞こえてくる。

生田の肩越しに室内が見えた。ビルの空き缶が転がり、半開きのスポーツ新聞が床に落ちている。雀卓を囲んだ三人の男たちが、鋭い視線で私を見つめていた。

暴力の臭いをぶんぶんとまき散らし、それを隠そうともしない人種だ。

生田は私に同意を求めるかのよう、さらには性的なジョークを話して自分で笑つたが、私は笑わなかつた。

生田は、頬にへりつけた薄ら笑いを気まずそつにひつこめると言つた。

「うつちは被害者のようなもんだー! こそそこ嗅きまわつくれるなよ、えつ、探偵さんよ。俺たちにもプライバシートーもあるからさー」

そう言うと、私の鼻先で思いっきりドアを開めた。同時に部屋の中から、どつと爆笑が湧いた。再び麻雀の始まる音がする。

その音を背中で聞きながら、私は部屋を後にした。

午後三時過ぎに、テッサーの住むマンションに電話をかけた。プロダクションが寮として借りている賃貸マンションだ。二DKの部屋に六人のフィリピン娘が寝起きしている。

電話を取つた娘のたどたどしい日本語に、たどたどしい英語でナシシを呼んでくれるようにならんだ。彼女たちは本国の家族に少しでも多くの仕送りをするために、休みの時間でも表へはあまり出ず、部屋で過ごすことが多い。プロダクションではそんな事情を察してテレビゲームを置いておくところもある。もつとも、朝まで続く労働に疲れ、外へでるだけの元気が残つてい

ないこともあるだろう。

「パドレスさん?」

「おー、タカミドさん。何かわかりましたか」

「生田に会いました。お姉さんとは離婚しています」

「マリアンばー」

まだ、という私の言葉に、落胆した気配が無言のうちに伝わってきた。

「ところで、ミス・パドレス」

「テッサーでかまいません」

「あなたの友人で日本人と結婚をしている人はいなないだろ

うか。お相手をプローカーから紹介された人ね」

つまり、偽装結婚をあつせんするプローカーに心当たりはないか、と聞いたのだ。

「ちよつと待つね」

そう言つてテッサーは電話の向こうで何か言つている。

早口なタガログ語なので私はわからぬ。

「お待たせ、タカミドさん」とテッサーが受話器の向こうに戻つてきた。

「友達、あなたに会うの怖い、言つています。でも結婚屋さん教えてくれました。言います、いい?」

私はあわててメモを出した。彼女たちは入国管理でかなり怖い思いをしてきたのだろう。それに街中の交通検問などでもパスポートチェックを要求されれば拒むことができない。そこでオーバーステイが発覚する、その場から強制送還に向ての手続きが否応なく進行していくのだ。

テッサーは二人の男の名前と電話番号を告げた。番号から見て、一人とも名古屋市内に住んでいるようだ。

私は、現に増えている「じやばゆきさん」を取材している風俗ライターという設定で電話調査を試みた。雑誌の名前としては、「ポスト」や「現代」ではなく、「アサヒ芸能」などとならぶ芸能ジャーナルの名前を出した。刺青のグラビアや、風俗街の体験ルポが売りになつていて、あの雑誌である。

一人の男は、面倒くさそうに断られた。しかし、二人の男はかなり好意的に話に乗つてきた。

「じやばゆきさんの日常と、その中に埋もれたいろいろなエピソードを、是非聞かせて欲しいんです」

「気持ちはわかるんだけどね、現に商売をしている俺の立場だとちょっとね。あの、まずいんですよ」

「お会いしたいんですけど」

悪いけど無理だな。他の業者へのかねあいもあるし、それに最近ヤーさんがつるさくてね。わかるだろう

そう言つた後、男はしばらく考えて、今は現役を引退した結婚ブローカーを紹介しようと言つた。

「あいつなら、もう内部の人間じゃないから大丈夫だろ。金に困つてゐるみたいだから、謝礼さえ払えれば面白い話が聞けるかもな」

私が礼を言つと、男は、お宅のグラビアにはお世話になつてゐるからさ、と白目味に笑つた

男が紹介してくれたのは金井といふ名の男だつた。早くアポイントを取ろうと電話をする。

「俺のこと、誰から聞いたの?」

「名前は明かせませんが、お知り合いのお知り合いと言つて。早速ですが、本題に入ります」といつて、またしても雑誌の名前を出して取材意図を告げた。警戒しているのは最前の男と同様だつたが、謝礼を出すと話したとたん、男の口調が前向きにな、会うことに同意した。金に困つてゐると言うのは本当らしい。今池に住んでいると言うことだ。

私は、今から訪問すると告げて電話を終えた。姿見の前で服装をチェックした。紺のブレザーやグレイのパンツ。何とかフリーランボーライターに見えなくもないだろう。アパレルや、役人に見えええしなければいい。ちよつと考え、ネクタイだけ外してブレザーのポケットに入れた。

のみちルボライターも探偵も大した違いはない。金のためには調査をし報告書を書く。それが読者のためか、依頼人のためかの違いだけで、やくざな浮き草稼業には違ひない。

起きは近日発売予定の『バラの刺青(タトゥー)』でお読みいただけます。

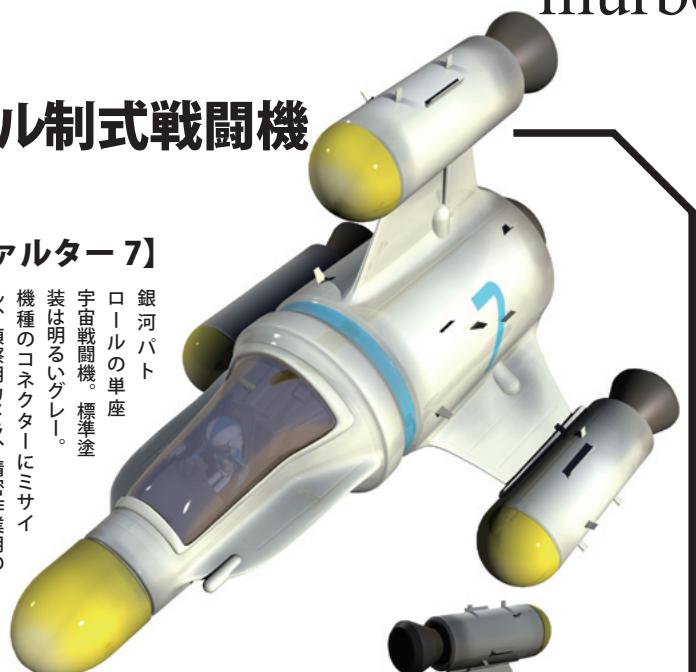
# 機械恐竜現る！の作り方

murbo

## 第2回

### 銀河パトロール制式戦闘機

ヴァルター7



#### 【ヴァルター7】

銀河パトロールの単座宇宙戦闘機。標準塗装は明るいグレー。機種のコネクターにミサイル、偵察用カメラ、精密作業用の腕など、さまざまなユニットを取り付けることが出来る。

宇宙キッドはゴース踪跡中に金属怪獣たちに撃墜された。後に宇宙科学研究所SSCで修理され、その時の調査によって宇宙キッドのサポート銃、レーザーバルカンなどの装備が開発された。



#### 【ミサイルユニット】

高機動スラスター付の誘導爆弾。爆散吸収剤の効果で破壊した目標の飛散を最小限に留める。



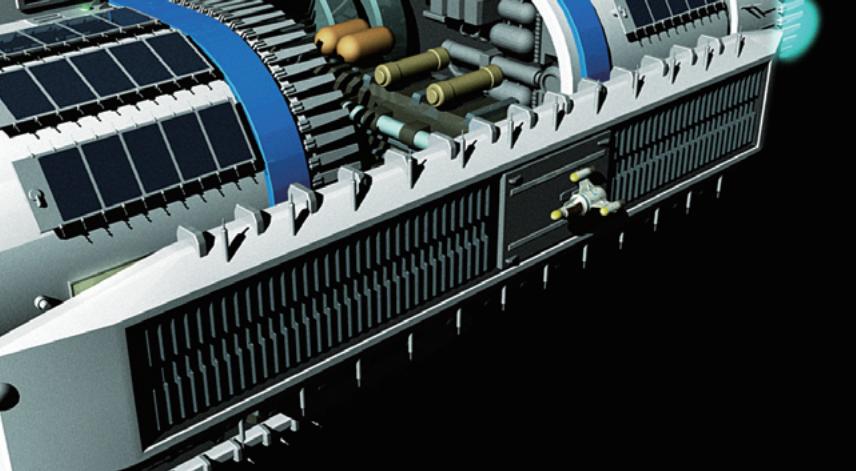
#### 【アームユニット】

作業用装備。宇宙船の修繕などに利用される。カメラユニット装備と組んで強行偵察なども行う。



#### 【カメラユニット】

偵察用装備。全周囲映像を撮影するカメラと通常仕様より高度な情報を収集出来る各種センサーを内蔵している。



カタパルトを含むヴァルター7格納ユニットは、固定式で作戦によって発射カタパルトを変更する。



ヴァルターシリーズ  
主任設計師 メア  
リー・ハルトマン  
現在、ヴァルター9  
を設計、開発中。



### 【ヴァルター7ブルー】

宇宙魔人ゴーストの戦  
いで大破した後、地球  
の環境に合わせて改修  
した。カラーリングも  
明るいベージュから青  
の濃淡のカモフラージュ  
に再塗装された。



#### 【ミサイル】

機首のマルチコネクターに接続するミサイル。  
大型ミサイルの中に50発の小型ミサイルを内蔵し、大型ミサイル発射後、機動性の高い小型ミサイルが四散する。

宇宙船口ボを倒すた  
めに急遽作られた。



### 【ヴァルター7レッド】

ヴァルター7  
ブルーにオリジ  
ナルのユニット  
パーツを取り付  
けられるようにな  
再設計された。



#### 【粒子光線砲】

機首のマルチコネクターに接続する粒子ビーム砲。  
細い粒子を高速で撃ち出して目標を叩き割る。粒子が高速で発光している  
のでレーザーのように見える。  
精神破壊口ボ戦で使用。



アンドロイド羊は電気人間の夢を見るだろうか？〈羊〉たちは今朝も愛想を振りまきながらやつてくる。さあ、みなさん、きょうもいい天気ですよ。食事の準備がととのっています。今朝のメニューはみなさんの大好きな――

〈羊〉たちは親切だ。われわれ地球人は太陽系から七百光年以上はなれたこの惑星でなに不自由なく暮らしている。五百組の夫婦と、子どもが百十数人。仕事はない。ただ遊んでいるだけでいい。ぜんぶ、〈羊〉たちがやつてくれる。娯楽施設は過剰なほどととのつている。自然条件もすこぶるいい惑星だ。われわれはただ、毎日気ままに、のんびりと、好きなことをやつて過ごしている。

る。

もつと

も、これが  
われわれの

仕事と言えば仕事だ。〈羊〉たちの世話を受けながら、この究極のリゾートに、ただ滞在しつづけるだけ。会社が希望者を募った。申し込みは殺到した。当選した家族は、それで一生分の運を使い果たしてしまったにちがいない。

〈羊〉たちも、地球人のように夢を見るらしい。じつのところ、彼らは地球の羊にはあまり似ていない。むしろ、人間にちかい。直立二足歩行の、ヒューマノイドである。身長は三メートル前後。ただ、全身がふかふかとした白い毛に覆われている点がわれわれとちがうところだ。その毛から上質のウールができさえする。

地球へ帰りたいか？ そう妻に聞いたことがあつた。ええ、とても。妻はこたえた。でも、地球へ帰つても、わたしたちは

だが、ウールの原料を皮膚から生産していても、彼らが地球人とおなじ知性をもつ生物であることにかわりはない。

ひょっとしたら、〈羊〉たちは疲れぬ夜、地球人が一匹、地球人が一匹とかぞえるかもしない。だが、ここで〈羊〉たちの世話になつていてるわれわれは、たとえ地球へ帰還したとしても、疲れぬ夜に羊の数をかぞえることは二度とないだろう。羊の数をかぞえてほくそえむのは、会社の上層部の連中だ。

〈羊〉たちと交易の協定を結ぶのにはひどく苦労したらしい。だがお互いに利益となる条件を発見することができた。そして会社は〈羊〉たちの生産物を大量に輸入することができ、一部

# アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか？

## 弾射音

の社員  
の家族  
は永遠  
のバカ  
ンスを

手にいれ、〈羊〉たちはみずから嗜好を大いに満足させるじつに効率のいいシステムを実現することができた。

〈羊〉たちは信じられないくらいやさしい。地球人の流儀で笑顔をつくることを習得してわれわれに微笑みかけ、頼みもしないことまでしてくれる。子どもたちには受けがいい。まるでマスコットのような白い毛むくじやうの顔に愛敬のある表情を浮かべて、おどけてみせたりする。

二度とまともな暮らしにはもどれないでしょう。ここでの自堕

落な生活に浸りきつてしまつたから。ふたたびあくせくと毎日を過ごすことなど、できるものですか。ここはパラダイスだわ。

〈あれ〉さえなければ、ほんとうに、文字どおりのパラダイス。

〈あれ〉さえなければ。

そろそろ〈あれ〉がはじまる季節だ。

妻と息子を連れ、緑豊かな丘陵地をハイキングしていく、ふ

と息がついた。妻はすでに数日前から不安げな表情だ。息子は無意識にからだのあちこちを搔いている。わたしの全身にも、かすかな痒みが。これから一日ごとに、痒みはごくゆっくりとひどくなつていく。

ここはリゾートか？ とんでもない。そう思いこむように、われわれはみずからを強いているだけだ。

ここは牧場なのだ。ただし、人間が運営する、羊の牧場ではない。〈羊〉たちが地球人たちを放牧している。

人間牧場だ。

そして、地球人のからだはリソマ菌牧場だ。

地球人のからだがこの惑星のリソマ菌の繁殖にもつとも理想的であることが判明したのは、ほんとうに偶然だった。会社の上層部がそれを利用しないはずがあるだろうか。リソマ菌はわれわれの体内で異常繁殖し、群体を形成して、一定期間ごとに糸状になつてわれわれの皮膚をびっしりと覆い、服の下で四六時中うごめくようになる。それが〈羊〉たちの大好物だ。われわれ地球人がいなければ、リソマの糸ははるかに貧弱な大きさの、

この惑星で最大の貴重品のままだつたのだ。

害はない。ものすごく痒いだけだ。だから、会社はわれわれを〈羊〉たちに売ることができたのだ。われわれが死ぬほど痒みと、全身糸だらけになつてその糸を〈羊〉たちがよだれを垂らしながらていねいにひっこぬいていくのを我慢しさえすれば、われわれに終わりのない休暇を与えてくれた会社に多大の利益をもたらすことができるのだ。

とつくる昔に絶滅した地球の羊のかわりに、この惑星の〈羊〉たちから上質のウールを手にいれることによって。

『アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか？』は、『ばおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2』からの転載です。



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MW4ZC78>

# 弾射音既刊本

## パッチワールド

人格シミュレーションとなった村田は独自の理論を実証するため、恒星間宇宙船を乗つ取りヒアデス星団で実験を再開する。地球を破壊した謎の結晶体による地球再生の可能性を突き止める。……クリス・ボイスの名作『キャッチワールド』へのオマージュ。第一回SF新人賞候補作を加筆。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>



## クラフトロン 弾射音短編集 SF編

「クラフトロン」…夫のテリーは旅先の地球で他の観光客もろとも消息を絶ち、私は軍人として搜索を命じられる。変異に地球は飲み込まれ、私はついにテリーの真実を知る……。他三篇。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MP4I8JE>



## 今度、死ぬことになった 弾射音短編集 ミステリ編

「今度、死ぬことになった」…私は大学時代の友人から、「今度、死ぬことになった」という文面の手紙を受け取る。そして死んだ。彼は恨みを持つ女のマンションに爆弾を仕掛けたと遺言を残す。……他二篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MOZXM22>



## 理由なき朝食 弾射音ショートショート集 Vol.1

夜中の三時、ママはぼくをいきなり起こす。真顔で朝食を食べなさいと言うのだ。パパとお姉ちゃんはパニックだ。そのうちに、みんなは泣きながら真夜中の朝食を始める……他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MUQJGT8>



## ばおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2

暇だったので、象と猫のハイブリッドを作ってしまった。巨大な象猫は元気に「ばおにゃん！」と鳴く。妻は今すぐ捨ててきなさいと言う。ぼくはいったいどうしたらいいのだろう？……他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MW4ZC78>



## デイズ・オヴ・ホミサイド

殺人が犯罪ではない近未来。簡単に殺し合う人々。加藤芳雄はある日、吉田美枝子を地下鉄内で殺す。政府のコンピューター内に蘇った吉田美枝子は、逆に芳雄を殺そうと反撃に打って出る。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKDQSLA>



## 彼女の手の中のバービー

彼女はいきなり僕の顔に化粧をした。僕は彼女の手で、どんどん女になっていく——美人女子大生と女装少年の、奇妙な愛のかたち。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWY6ISQ>



## レイルウェイ、ターミナル、そして故郷へ

僕は棺桶職人。ある日、大変なことに気づいてしまう。いどうるが手許にないのだ。人は、いどうるなしでは人は生きていけない。僕は、いどうるを取り戻すため、故郷へ向かって旅を始める。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKCJPR0>



# 栗林元既刊本

## 神様の立候補／ヒーローで行こう！

西本は広告会社の営業。彼に下された使命は、新聞用選挙広告を法定回数五回分を全て東海新聞の扱いで獲得すること。ところがその候補者は、「龍神様のお告げで立候補を決意した」というおばあちゃんだったのだ。  
<http://www.amazon.co.jp/dp/B00IB9F4OE>



## 1988 獣の歌／他 1 編

気がつくと、「獣」は新生児の心の中にいた。今まさに殺されようという瞬間だった。間一髪、肉体から抜け出した獣は、少女の心に飛び込んでいた。しかし無理な躍跳で、多くの記憶を喪失してしまう。他 1 編  
<http://www.amazon.co.jp/dp/B00KK5161U>



## 盂蘭盆会〇〇〇参り（うらぼんえふせじまいり）他 2 編

18 歳を前にした仁は「明日のお参りにはお前も来なさい」と、父から告げられる。話によれば長男は兄弟の中でも比較的早く「お参り」に連れていかれるのだという。果たしてそのお参りとはどのようなものなのか。他 2 編  
<http://www.amazon.co.jp/dp/B00NCD05MK>



# murbo 既刊本

## 宇宙キッド 怪獣図鑑 魔人ゴース編

架空の連続 TV アニメーションである、宇宙キッドに登場する敵怪獣などをカード風のレイアウトで紹介する図鑑。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EM4ST80>



## 宇宙キッド 怪獣図鑑 ドーモル団編

架空の TV アニメ、宇宙キッドに登場する敵怪獣のカード風のデザインで紹介する図鑑。第二巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00F0CFGVQ>



## 戦え！宇宙キッド 怪獣図鑑 超電子頭脳ズレイノウン編

架空の TV アニメ、宇宙キッドの敵メカ怪獣をカード風に紹介した図鑑。第三巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00HRW3ELG>



# 巻末付録 『機械羊のAR』

機械羊の3DCGモデルのAR（拡張現実）をスマートフォンで見ることができます。

このARはJunaioというアプリ（無料）に対応しています。<http://www.junaio.jp/download>からダウンロードしてください。対応OSはiOSとAndroidです。

## 【鑑賞方法】

(1)のQRコードと(2)のマーカーをプリントアウトして机などに置いてください。

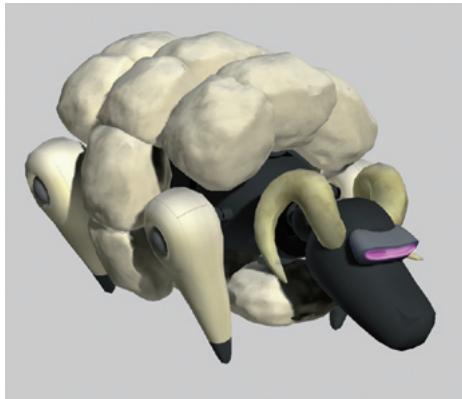
Junaioを起動してQRコードをスキャンします。スマホのカメラをQRコードに向けてください。アポリオン3の3DCGデータがダウンロードされます。少し時間がかかりますのでお待ちください。

その後、マーカー画像にスマホをかざします。機械羊が机の上に現れます。

(1) QRコード



(2) マーカー



電子パブは  
広告を募集  
しています。

一枚 55mm x 55mm。  
一回料金 1,000 円  
年契約 10,000 円  
240dpi 以上の解像度、  
cmyk モードの  
psd フォーマットのみ受付け  
ています。  
詳細と受付は  
[denpub@1001sec.com](mailto:denpub@1001sec.com) へ。



2015年1月1日 編集発行／電子パブ

<https://www.facebook.com/groups/729158773822355/>

デザイン・編集／murbo 禁無断転載・複製・転載